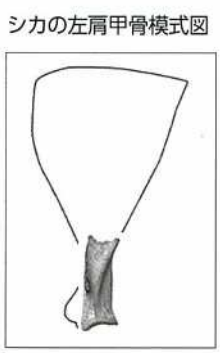
荒川ふるさと文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
TEL03(3807)9234
登録(08)0071号

文化財NEWS速報

～東京低地で初の発見～ 占いに使った動物の骨



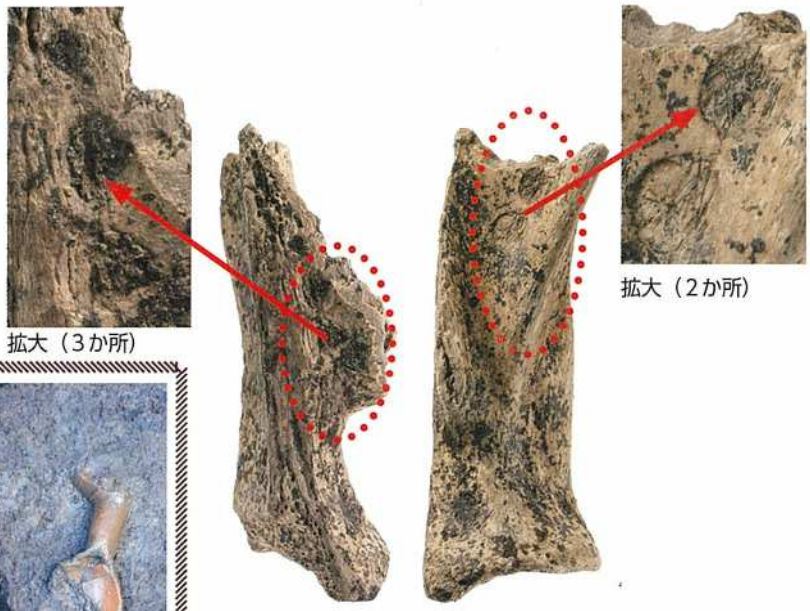


写真１　卜骨。
東日本では鹿の肩甲骨を使った事例が多い



写真２　高坏。祭祀に関連する土器

どんな占い？　町屋四丁目実揚遺跡O地点の本調査で、シカの肩甲骨を使った卜骨が見つかった。卜骨とは占いに使った動物の骨である。シカやイノシシなどの骨に火を当てて、焼くことでできたヒビや割れの様子で、吉凶を占った。骨には占いの結果であろう痕、列点状に跡が並んでいる（写真１）。日本では弥生時代以降、祭祀（まつり）や占いと関わりのある遺物が大陸の影響を受け見られるようになる。卜骨は都内では向ヶ岡貝塚（文京区）から出土しているが、低地部では実揚遺跡が初の発見である。

いつのもの？　卜骨に使ったシカの肩甲骨は、溝の底面から見つかった。占いに使用した後に、その一部を投げ入れたか流れ込んできたものだろう。この溝から土師器と呼ばれる素焼きの土器の破片が551点見つかっており、溝の形状とそれらの土器の形から、弥生時代末から古墳時代前期の溝と考えられる。このことから卜骨も同時期のものと推測される。

O地点の発掘調査　同じ溝から高坏も６点出土した（写真２）。高坏とは皿に脚がついた形をした器である。高坏もまた祭祀（まつり）に用いられたと考えられており、卜骨とともに祭祀や当時の人びとの精神性を考える上で貴重な資料である。これまでに実揚遺跡からは赤彩された大型の壺の出土や（M地点）、魚の漁の網に用いたおもり（土錘）数点を意図的に置いた状態で出土した例など（I地点）、祭祀に関連した痕跡が発見されている。なお、今回で当遺跡の発掘調査は15ケ所目になるが、この溝は、大きさ、時期、方向などから、以前に調査したJ地点とH地点の溝と繋がる可能性がある。仮に直線距離にすると、58mにおよぶ。建物の跡ではないかとされる周溝状の遺構よりはるかに大きく、巨大な何らかの施設（の一部）であった可能性がある。

区内の発掘調査　以上の内容は、『町屋四丁目実揚遺跡O地点発掘調査報告書』に詳しく書かれている。また、令和６年度から実施してきた『延命院貝塚C地点発掘調査報告書』が新たに完成した。こちらは延命院貝塚３カ所目の調査の成果である。図書館等で手にとってみてもらいたい。

〈八代和香子〉

【事務室一時移転に伴うお知らせ】

周知の埋蔵文化財包蔵地内で土木工事等開発事業を予定の場合、届出が義務付けられています。事務室の一時移転に伴い、届出住所、連絡先等が変更なっております。

場所　荒川区立生涯学習センター３階第５会議室（荒川区荒川三丁目49番１号）※土日祝休み
電話番号　03－3807－9234
ＦＡＸ　03－3801－7630

奥の細道絵巻物

うれしいお買い物⑩

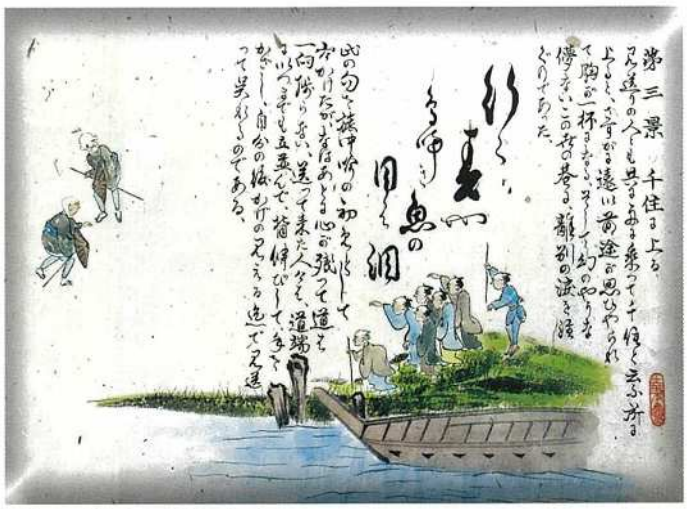


写真1　「第三景　千住に上る」



写真2「第一六景　雲巌寺」



写真3「第二五景　白川の関」

芭蕉の旅を描くということ　先日、松尾芭蕉の「おくのほそ道」の旅路を描いた、一風変わった絵巻を収蔵したので紹介したい。

「おくのほそ道」の本文の訳文と挿絵で構成された肉筆・彩色の絵巻で、場面は、「芭蕉庵を譲る」から「白川の関」まで全二五景からなる。

各画面の構成は余白に本文がつづられ、発句は大きな字で書かれている。例えば「第三景　千住に上る」（写真1）を見ると、隅田川と芭蕉・曽良が乗ってきた舟、別れを告げる弟子たちが描かれている。左の二人が芭蕉と曽良で、後方を振り返って、見送りの7人と視線を交える。

本文には次のようにある（筆者句読点加筆）。

第三景　千住に上る
見送りの人とも共に舟に乗って千住と云ふ
所に上ると、さすがに遠い前途が思ひやられて胸が一杯になる。そして幻のやうな儚ないこの世の巷に、離別の涙を注ぐのであった。
行く春や鳥啼き魚の目は泪
此の句を旅中吟の初めとして出かけたが、なほあとに心が残って道は一向捗らない、送ってきた人々は、道端にいつまでも立並んで、背伸びして、手をかざし、自分の後かげの見える迄で見送って呉れるのである。

このように、本文は作者が意訳したものである。

その作者　絵巻には日時の記載はないが、恐らく明治時代に作成されたと考えられる。というのも巻末の落款に「永僊」とあり（写真3）、明治時代に活躍した京都出身の絵師、別名、斎田永浦の作と考えられるからである。永僊は彦根藩御用絵師だった佐竹永海に絵を学び、明治15年（一八八二）前後、日本画の復興を目的とする内国絵画共進会等で活躍した。

子どもの絵本　巻末の「白川の関」の後の款記には、次のように書かれている（写真3）。

奥の細道絵巻物として世に現はす程のものにあらず、素人が苦心した処が画面に幾分なりと見ゆる所を以て、子供の絵本として御笑覧あらん事を

つまりこの絵巻は、世に出す程のものではなく素人が一生懸命描いたものなので、子供の絵本として見てほしいとしている。確かに独自の場面選択や場面構成に挑んでおり、後世に多大な影響を与えた与謝蕪村画「奥の細道図屏風」の影響はほとんど認められない。例えば、芭蕉が長期間滞在した、現栃木県大田原市の雲巌寺の廊下（写真2）や、江戸時代すでに廃止され存在しない白河の関所（写真3）などに、永僊のオリジナリティを見ることができ、本絵巻の味として魅力となっている。

〈高柳吟音〉

あらかわの記念碑

其の5

近代の大物狂歌師 秋の屋望成の石碑



写真1

この碑なんの碑？　西日暮里三丁目、夕やけだんだんを下り、右に曲がって六阿弥陀道をしばらく行くと近くのマンション前に一つの石碑がある（写真1）。谷中七福神巡りの際に見かけた人もいるかもしれない。

　この度問い合わせを受け、ほとんど知られていないこの碑を調べてみた。

調査開始！　まずは表面の字を読んでみよう（図1）。意訳すると、狂歌師は先人の真似をして一人で酔って楽しんでいる。皆がさめている世で。このような意味であろうか。「酔」「さむる」等、お酒に関する言葉に掛けて、狂歌師への皮肉が込められている。

　次に石碑の側面（写真2）を見ると「明治二十八年八月建之」と彫られている。明治28年は西暦一八九五年。今から130年以上前にこの碑が建てられたことがわかる。

秋の屋望成
狂歌師は昔の
ひとのかすなめて
独酔ひけりみな
さむる世に

図1　翻刻



写真2　石碑側面

秋の屋とは誰だ？　さて、石碑右下に彫られている「秋の屋望成」がこの歌を詠んだ人物と推測できるが、一体どんな人物なのだろうか。

　「秋の屋望成」を調べると一冊の著作が見つかった。『狂歌再餅』（大正10年刊）である。これによれば、秋の屋望成は文久2年（一八六二）、谷中三崎町枇杷橋（現台東区谷中辺り）の近くに生まれた狂歌師だったようだ。谷中三崎町は現在の台東区と文京区の境目辺りだ。

　秋の屋は幼少時代から文芸に親しみ、漢詩や詩歌、狂歌などを雑学新誌に投稿し、入選しないことは稀だったという。「塵山」や「安倍川望成」等の名も用いた。最盛期である天明期（一七八一～一七八八）に比べ衰えていた狂歌界に対し、若手有志の青年狂歌会（後、鶯蛙会と改称）を設立し盛り上げた。野崎左文とともにこの時期を代表する狂歌師の一人である。

かつての花見寺に何を思う　なぜこの場所に石碑が建っているのだろうか。秋の屋の別の著作である『狂歌渋柿集』（明治34年発行）の中で図1の狂歌を、「明治乙未のとし葉月日暮里村の妙隆寺の庭中に建てし碑のおもてに鐫れる自嘲の歌」と紹介している。「明治乙未年」は明治28年だから、石碑側面に彫られている建立年と一致する。自嘲の歌とあるので、狂歌師への皮肉は秋の屋自身に向いていたとわかる。

　また、この記述で注目すべきは、石碑が後に廃寺となった妙隆寺の庭に建てられたことである。妙隆寺は元禄7年（一六九四）創建の寺院だ。寛延元年（一七四八）に境内の傾斜を活用して躑躅等を植えて、回遊式の庭の整備を行った。隣接する修性院や青雲寺とともに花見寺として知られるようになった。境内には躑躅の他、桜等が咲きほこり、茶屋が出ていた。しかし、明治時代以降境内の土が売られていった結果、回遊式庭園としての性格は失われ、その後、大正時代に廃寺となったとされる。

　秋の屋の自宅は下谷区谷中初音町四丁目（現台東区谷中三丁目）で、妙隆寺とは100ｍほどの距離であったようだ（『俳諧武玉川三篇輪講』）。少なくとも身近な寺であったに違いない。花見寺には多くの歌碑や記念碑が建てられていたが、最後に建立されたものかもしれない。近代の妙隆寺の様子をうかがえる貴重な資料だ。

　現在この石碑の所在地は、妙隆寺のあった場所からはやや外れている。妙隆寺から移動したことは明白であるが、誰がいつ移動させたのかは今のところ不明だ。

　この石碑に関して何かご存じの方は、荒川ふるさと文化館までご一報いただきたい。

〈大内駿人〉

リニューアル現状レポート

引っ越し作業と犬張子

引っ越し作業　あらかわ区報4月11日号や区のHPでお知らせしている通り、現在当館はリニューアルに向けて閉館し、引っ越し作業を行っています。事務室や職員だけではありません。収蔵庫の資料も温湿度管理され、警備のついた倉庫に一時移転となります。

　移転にあたって、個々の資料がどこにあるのか見失わないように、ましてやどさくさで紛失することがないように、リストを作って場所を移すたびにチェックをします。そして輸送中壊れることがないように梱包し、当館からの搬出にあたっては広い企画展示室に仮置きした後（写真1）、トラックに乗せて倉庫に運び出します。

収蔵庫の中の犬張子　そんな作業の中では、思わぬ出会いもあります。例えば、古い犬張子もありました。でんでん太鼓がついた出来栄えのよい立派な犬張子です（写真2）。ケースには「南千住町健康週間乳幼児審査会」、「賞　第二位」と書かれています。二位の記念品だったのでしょう。ケースの中にあった賞状から、昭和14年（一九三九）のものだとわかりました（写真3）。



写真1　企画展示室における資料の仮置き



写真2　犬張子



写真3　表彰状（一部加工）

南千住町の乳幼児審査会　この審査会は、南千住町の児童愛護運動の一イベントで、昭和13年から始まりました。ステージに赤ちゃんと母親が上がり、審査を受けました。南千住町や地元の医師から地元有志まで町を挙げて行われたイベントで、翌14年からは児童相談所も開かれました。同15年からは区内7ヶ所で審査会を開催し、計2500名の赤ちゃんが参加したといいます〈鈴木英男「荒川区の児童愛護運動」（『社会福利』24―7、一九四〇年）〉。なお、戦後も行われていて、昭和22年の記録映像も残っています（昭和22年5月20日公開「子供たちよすこやかに！」）。

　一九一〇～六〇年頃にかけて、乳幼児の健全な育成と育児知識の普及のため、自治体・民間主催のいわゆる「赤ちゃんコンクール」が全国各地で盛んに行われていました（大出春江『赤ちゃん審査会というメディア・イベント』、大阪大学出版会、二〇二一年）。理想の身体が設定され、やがて戦時体制下の動員へとつながっていきますが、一方で後の乳幼児健診につながる一つの潮流にもなりました。

新しい展示に向けて　ところで、この犬張子のデザインは、元区指定無形文化財保持者の田中作典氏の作品に似ています。時期的に父の留吉氏の作品かもしれません。もっとも収蔵庫移転には完了日があるため、あまり調べている時間はありませんでしたが、実際に実物を目にすることによって、資料の価値を再確認できました。約一年半後の当館の展示室で、皆さまに見てもらえる日が来るかもしれません。ご期待ください。

〈亀川泰照〉

伝統工芸関連イベントのお知らせ

10月21日(水)・22日(木)
荒川区伝統工芸技術保存会主催
「あらわ座市」《日暮里サニーホール》

12月17日(木)～2月25日(木)
伝統工芸品の展示　衣裳着人形　竹中重男氏・竹中温恵氏《荒川区役所1階エントランスコーナー》

令和9年2月25日(木)～4月22日(木)
伝統工芸品の展示　木目込人形　柿沼正志氏・柿沼利光氏《荒川区役所1階エントランスコーナー》

訃報

荒川区指定無形文化財（工芸技術・木版画摺）保持者、松崎啓三郎氏は、去る令和8年9月23日に逝去されました（享年89歳）。謹しんでご冥福をお祈りいたします。